



## 毎月23日は「福岡市 子どもと本の日」です ～子どもの読書活動を推進しましょう～

### 読書に親しむとは・・・



読書と最も関わりが深い教科は国語です。学習指導要領では目標の中に

- (小) 1, 2学年 **読書に親しみ**、いろいろな本があることを知ること。
- (小) 3, 4学年 幅広く**読書に親しみ**、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと。
- (小) 5, 6学年 日常的に**読書に親しみ**、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと。
- (中) 1 学年 **読書**が、知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることに役立つことを理解すること。
- (中) 2 学年 本や文章などには、様々な立場や考え方が書かれていることを知り、自分の考えを広げたり、深めたりする**読書**に生かすこと。
- (中) 3 学年 自分の生き方や社会との関わり方を支える**読書**の意義と効用について理解すること。

とあります。

「**読書に親しむ**」という言葉が多く使われています。「**読書に親しむ**」はどのようなことでしょうか。まずは子どもたちの身近に本を置くことが大切です。しかし、それだけでは親しむことにはなりません。読書を通して、新しい知識を獲得したり物語の世界を疑似的に体験したりできる読書の楽しさや面白さを感じる事が大切です。また、読書によって、疑問に思っていたことが解決したり、新しい世界に触れて自分の興味が広がったりする楽しさを味わうことが大切です。そのような体験を重ねると、読書の楽しさや有効性を実感しながら、日常生活の中で主体的、継続的に読書を行うことができます。ここまできたら、しめたものですが、そうは簡単にいきません。

子どもたちが、読書の楽しさを感じることができる本に出合えるように、学校では、先生やボランティアの方の読み聞かせ、学級文庫の充実、学校図書館の利用について考えてみましょう。また、家庭では、読み聞かせ、親子読書、公民館での本の貸し出し、公共図書館での本の貸し出しなど考えてみましょう。「**読書に親しむ**」ことができている子どもは、自分の世界や考え方が広がり、想像力が豊かになることと思います。



## 授業の中で取り組む読書活動例

### 打楽器で絵本の音楽をつくろう 4年生音楽

#### ○ねらい

音楽づくりについて、オノマトペが使われている絵本の絵や言葉のリズムからイメージを膨らませ、絵本を楽譜に見立てて、打楽器で、まとまりのある音楽に構成したりすることを通して、音の特長を生かした音楽づくりをすることができる。

#### ○授業の流れ（全3時間）

1. 教室にコーナーを作り、絵本をいつでも読めるようにしておく。

・休み時間 朝学習の時間 など

#### <第1次（1時間）>

2. グループで表したい絵本を1冊選ぶ。決まったら友達と一緒に音読する。
3. グループで絵本に合う打楽器を探し、学期を分担する。
4. 絵本に沿ってグループで即興的に演奏する。
5. グループで演奏を聴き合う。

#### <第2次（2時間）>

6. まとまりのある音楽をつくるためのルールを決める。
7. 絵本の絵や言葉のリズムなどに合わせて、楽器の音色や奏法、リズム、強弱などを工夫する。
8. 絵本に合わせて、まとまりのある音楽にするために、重ね方やつなげ方などを工夫する。
9. 絵本を見ながら、それぞれのグループの演奏を聴き合い、工夫を感じ取る。
10. 作曲家による演奏を鑑賞する。(CD)

【本のリストより：「くつつあるけ」林 明子、「わんわんなにかな？」正高 信男、「ぴよんぴよんなにかな？」正高 信男、「サキサキ」穂村 弘、「がたごとなにかな？」正高 信男、「コンコンたまご」真木 文、「ぴよぴよ」谷川 俊太郎、「かっきくけっこ」谷川 俊太郎、「どうぶつ句会オノマトペ」あべ 弘士「もじもじさんのことば劇場 オノマトペ」西村 敏雄、「あっはっは」谷川 俊太郎、「くだものぱっくん」真木 文、「おのまとペの本」だん きょうこ「もこもこ」谷川 俊太郎、「世界のことばあそび5」こどもくらぶ】

「図書を活用した楽しい学習活動」学事出版 参照

※ 読書から感性が磨かれ、想像力や創造力が育つ読みができる実践です。考えたりイメージしたりしながら、頭と心動かして読むと、読書を「楽しい」と感じるようになることでしょう。

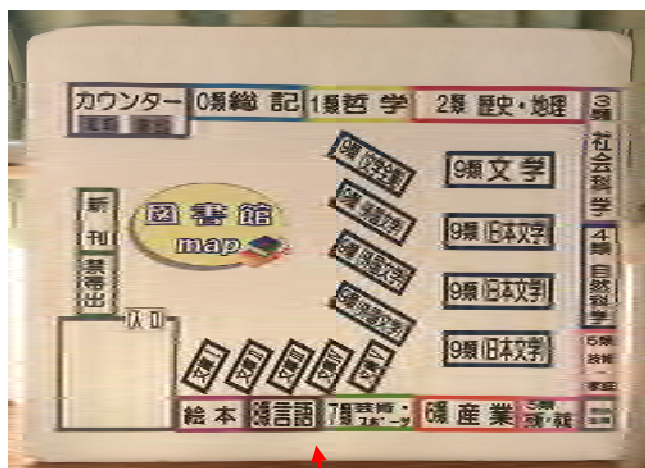
# Hello! 学校図書館 筑紫丘中学校

南区の高台にある筑紫丘中学校の図書館を紹介します。

全校生徒数420人、13学級の学校です。訪問した際は、桜の葉が少しずつ色づき始めた秋晴れの日で、校長先生が笑顔で迎えてくださいました。「本校の子どもたちは、読書が好きの子が多く、朝から熱心に読んでいます。」と話してくださいました。玄関から図書館まで校長先生に案内していただきましたが、廊下、階段に日頃の学習の様子がよくわかる掲示があり、子どもたちの頑張りがたくさん伝わってきました。



「筑中図書館へようこそ」の言葉に迎えられました。書架の置き方が工夫されていて、明るく清潔感あふれる雰囲気図書館でした。

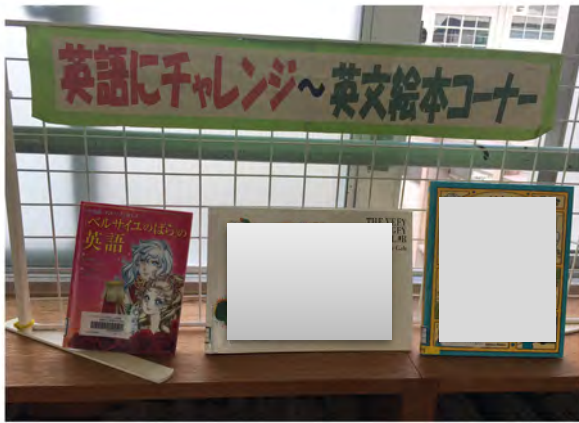


大きく見易い「図書館マップ」があったり、分類番号も大きく示してあったりと、子どもたちが本を探しやすい工夫がされていました。



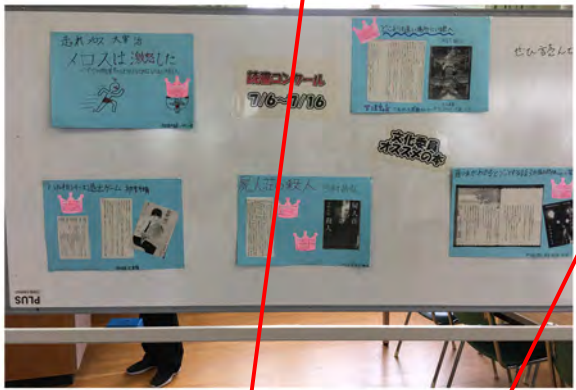
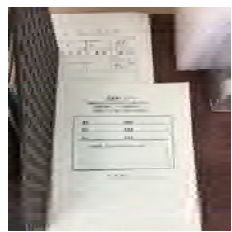


様々なコーナーを設けた配架の工夫



様々なコーナーが設けてありました。子どもたちに呼び掛ける掲示があり、本を選ぶ時のヒントになりそうです。また、文庫本コーナーや、ちょっとしたスペースを利用した小さな椅子が置いてあり、子どもたちが座って読んでいる様子が目に浮かぶようで素敵です。

子どもたちの活動がわかる工夫



専門委員会の子たちが「おすすめの本」のコーナーを作っていました。また、本のカバーや帯を利用し、季節の花と一緒に新刊の紹介がされていました。さらに、「読書コンクール」を行った掲示や新刊リクエストボックスもありました。読書週間には学校放送で本の紹介等のイベントも考えられているとのことでした。(次号で紹介します。)  
子どもと共に運営されている温かい図書館ですね。



## 本の帯を使った11月の掲示・展示

今月は、本の帯と空き箱を使った掲示物です。

おすすめの本を掲示するとき、空き箱を利用すると、表紙が見やすくなります。

もうすぐ12月。クリスマスの掲示物があると、子どもたちの心はわくわくうきうきすることでしょう。温かい雰囲気の図書館にしてみましょう。



箱（お菓子やチーズ等が入っている）を重ねて、本を掲示してみましょう。飾りは本の帯で！子どもたちは、思わず手に取って読みたくなることでしょう。



帯を細く折り、くるくると丸めて、はしとはしをホッチキスで止めて、輪を作りました。綿を入れたり、リボンを付れたり、帯で作ったツリーを貼ったりしてクリスマスリースを作りました。輪をたくさん作って置いておくと、子どもたちがさまざまな飾りを付けてくれそうです。





## 12月生まれの文学者



### 野中 柊(のなか ひいらぎ)と「パンダのポンポンシリーズ」

1964年12月5日 新潟県生まれ

三人姉妹の末っ子だった野中氏は、小学校に入学する前からアンデルセンなどの童話全集を読んでいた、誕生日のプレゼントも本でした。小学生の頃は、一人遊びが好きで本ばかり読み、卒業文集には「童話作家になりたい」と書いたそうです。

小説を書くきっかけは、結婚して生活が苦しかったからで、新人賞を受賞すれば賞金が入り、本が出版されると印税が入ると思ったからでした。童話を書くようになったのは、野中氏が書いた大人向けシリーズを読んだ童話編集者が「子ども向けにもなにか作品を書いては」と声をかけたからでした。

「パンダのポンポン」は、食いしん坊のパンダのクックのかわいい話です。すべての話にサンドイッチやオムレツなど食べ物がでてきます。

野中氏の小説は「本屋さんのルビねこ」「ダリア」など、童話・絵本は、「ヤマネコとウミネコ」「赤い実かがやく」などあり、童話を書くときには、作家として子どもたちが幸福な気持ちを味わう手伝いをしたいと思っているそうです。

### 大崎 善生(おおさき よしお)と「聖の青春」

1957年12月11日 北海道生まれ

大崎氏の実家の隣には作家の原田康子氏が住んでおり、なんとなく憧れがあったので、小学校の5、6年の時は、将来作家になりたいと思い、いろいろな本を読んでいた。

大学卒業後は日本将棋連盟に就職し、雑誌編集部門に移った後、1991年「将棋連盟」の編集長になりました。その後、2000年に「聖の青春」で小説家デビューしました。

「聖の青春」(新潮学芸賞)は、「東の羽生、西の村山」と称されながら29歳で早世した棋士、村山<sup>さとし</sup>聖九段の生涯を描いています。大崎氏は長い編集者経験から、小説を完成させるのは読者であり、自分がどれぐらいの読者を獲得しているのか、どんな人がどういう風に読んでいるのかがとても大事なことだと思っているため、「野性時代」の人気調査や読者カード、インターネットの書評などかなり気にしてよく見るそうです。

大崎氏の作品は、「将棋の子」(講談社ノンフィクション賞)、「パイロットフィッシュ」(吉川英治文学新人賞)などあります。

【あとがき】 今年は暖かな日が続き、10月後半から11月になっても最高気温が20度を超える日が続きました。季節を間違えて開花した植物もあったようです。例年9月中旬から10月の始めに開花していたキンモクセイも11月になりやっと開花し、甘い香りと共に楽しませてくれました。キンモクセイの花が散った直後は地面がオレンジ色に染まり、昼休みに子どもたちが集めてプレゼントしてくれ、教室がキンモクセイの香りに包まれたことを思い出しました。マスク生活が長くなり、秋の香りが楽しめない、季節を感じる事ができにくい生活が続きますが、どうぞ子どもたちの周りに季節を感じる本を置いてみてください。読書をする事で、秋の終わりや冬の始まりを楽しんでくれることでしょう。

(足立)





## 図書館員のひみつの本棚 187回

今月は、冬至(毎年12月22日ごろで、1年でいちばん昼の短くなる日)に食べると、カゼをひかないという言い伝えのある、あの野菜がテーマの本を紹介します。

### 『カボチャの絵本』

いとう みきお／へん ささめや ゆき／え 農山漁村文化協会 1999年 ¥2546(税別)

<お勧め年齢>

乳幼児☆☆☆ 小低学年★☆☆ 小中学年★★★★ 小高学年★★★★ 中学生★★☆

高校★★☆ 一般★★☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

### <本の紹介>

なぜ冬至にカボチャを食べるのでしょうか。冬至の頃は寒さが厳しく、野菜も少なくなって栄養のかたよる時期です。この本によると、病気にならず元気に冬を越せるように、栄養もあって保存もきくカボチャを冬至に食べる習慣ができたのではないかということだそうです。

『カボチャの絵本』では、そんな栄養満点なカボチャの育て方、食べ方、品種紹介、歴史などがイラストとともにわかりやすく描かれています。取り上げている作物について一通りのことが載っているため、小学校での調べ学習にも最適です。さあ、この本を読んだら、あなたも自分のカボチャを育てて、まるごとカボチャを楽しみませんか。

### <子どもに手渡す時のポイント>

この本は、「そだててあそぼう」シリーズの中の1冊です。「そだててあそぼう」シリーズは、全105巻。ほかに『ダイズの絵本』『イネの絵本』『ゴーヤの絵本』などがあります。「絵本」と銘打ってはいますが、文章や情報量が多いので小学校中学年くらいからがお勧めです。巻末にはもっとくわしい解説も載っており、大人でも十分楽しめるつくりになっています。姉妹編で「つくってあそぼう」シリーズ(『なっとうの絵本』『キムチの絵本』など)もあります。

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。



発行：福岡市教育委員会

総合図書館 図書サービス課

電話：092-852-0639

FAX：092-852-0801